
outheart

青二才

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

outhearth

【ZPDF】

Z63340

【作者名】

青一才

【あらすじ】

「これは矛盾の物語。神は万能ゆえに、存在する力を持つ
から、神は存在する。神は万能ゆえに、存在しない力を持つ
から、神は存在しない彼らは矛盾に苦悩する。矛盾を愛すか憎むか
は、彼らしたい。目の前にいるあなたは、矛盾は好きですか？ そ
れとも嫌いですか？」

回想（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

回想

2月下旬 神戸市 中央区

授業にいくか、探検にいくか、さあどうしよう。
西日の差し込む長い廊下を歩きながら、王手薰おうでかおるは考える。
方等学園に入学してから、早くも一年が経とうとしている。
だが一年近くの付き合いにも関わらず、広くも無いこの学園で全く未知の場所が存在した。

南館の資料整理室の奥 そこには地下への入り口があった。

一学期の初め、じやんけんで負けたという理由で押し付けられた図書委員。敗北した時は悲しんだものの、もう1人の図書委員が美女だつた事に心を躍らせた。布入緋居瑠ふいりゆるという自分にも劣らぬ変な名前を持ち、小柄で眼鏡をかけた色白の少女。しかし、どこか人を寄せ付けない雰囲気があり、それは他人を威圧するというのではなく、自分の方から人との関わりを拒絶するような印象を受ける。委員決めのホームページが終わり、休み時間に入ると、担任に呼び出され、その理由を知る事となる。自閉症。聞いたことが無く、名前での雰囲気しかつかめなかつたが、どのような病気であるのかはすぐに理解できた。コミュニケーション能力の低さ、というよりは言葉のつたなさが目立つていたからだ。第一回の図書委員会、布入は消え入りそうな声で自己紹介したのだが、彼女の発した言葉は「一年二組……布入緋居瑠……よろしく……お願ひ」と、接続語や活用形を間違っていた。

布入の病気持ちという第一印象はとても強烈だったが、その第一印象がゆえに、第一印象の衝撃はひときわ大きくなる事になる。彼女は言語機能に障害があるものの、知能的には優秀で、一凡人いちばんじんであ

る王手には完全に優等生とも感じられる存在だった。言葉さえ使わなければ、殆どの全ての事に対処でき、例外なのは男子との会話。

弱気な文学少女　それが彼女のイメージとなる。

もちろん、会話できないのは男子全員で、王手もその中には入っていたのだが、図書委員という共通項から、それを抜け出す事となる。布入と仲良くなり、三学期まで同じ図書委員としてあり続け、簡単な会話を繰り返していくと、色々な事を知った。

彼女の親族の男性は代々この学園の理事長を務めている事。

理事長は彼女の父親であるが、それは生徒達には内緒にしている事。

その父親は優しくて、この学園に関するいろんな話をしてくれる事。

この学園は築100年も経つており、何度も改裝工事をしていた事。

学園ができる前は、この土地にはとある宗教団体の本部があり、それを壊した事。

宗教団体の教祖は地下室を作っていたが、何故かそれだけは破壊せずに残してある事。

この図書室の一角にある、いつも施錠されてる資料整理室にはその入り口がある事。

彼女はその中に入つてみたと考えていた事、そして　彼女の家に予備の鍵がある事。

王手は迷える布入の背中を押す事にした。好奇心もあつたし、何より彼女が意見を自ら言つ事に感動したからである。そして、放課後に資料整理室に忍び込んだのが、ここで問題が起きた。誰もいないと思っていた資料整理室には人が居た。幸いその人物は寝ているらしく、ドアを開けるとその轟音が聞こえてきた。侵入者は既存者にすぐに気づいて、起こすことなく引き返す事に成功する。既存

者が誰かわからなかつたが、王手が学校のどこかでその背広姿を思い出し、先生の1人ではないかという推測にいたる。誰か確認するために、一人は隠れて、南館から唯一外に出る事が可能な渡り廊下を観察する事にした。夕焼けが沈みかけ、もう今日は帰ろうかという提案に一人が合意したとき、その者は現れた。

賀川豊彦 道徳の教師、ないしカウンセラーであり、校内で時折見かける青年。中学校なのに常に紺の背広を着ているから、あだ名はリーマン。サラリーマンよろしく、見事な七三と、子供にたいしても丁寧すぎる言葉を使うので、その名を呼ばない者は少ない。そんな特徴的な青年だったが、一人は後^{のち}二つの理由で覚えていたので、彼という事に全く気づかなかつた。

賀川は正直いつどこにいるか解らない先生だつた。道徳の教師として、たまに授業をしたり、カウンセラーとして定期的に保健室に現れるのだが、それ以外の行動は謎だつた。王手は派遣社員的な存在だと考えていたが、どうやら違うようだ。第一回進入以来、中の様子に聞き耳立ててから入る事にしたのだが、毎回のように、誰かが居る事に気づき、毎回のよう^にに、誰かを監視していると、それが賀川である事を知つた。

だから、賀川が、明らかに授業をしていると解る時に、王手は忍び込もうと考へた。カウンセラーとして保健室にいる時は、布入が相談者^{クライエント}の1人であるため猛反対された。もちろん、前者でも布入は反対したが、後者では、目を赤らめて反対されたので、王手はなんとか前者で説得しすることにした。そして、説得する事4日間。ついに布入は「勝手……する……もう……知らない」と怒つた声で、鍵を突き出してきた。

今は休み時間、王手は渡り廊下を静かに思案しながら歩いている。ただ単に、未来の想像に楽しんでいるという様子ではないようだ。

集合

今は休み時間、王手は渡り廊下を静かに思案しながら歩いている。ただ単に、未来の想像に楽しんでいるという様子ではないようだ。

王手は腹の奥に奇妙な躍動^{やくひい}のような物を感じながら、それを不安からくるものだと判断した。授業を休んだ事もそうだが、彼にはさらに一つの不安があった。

鍵を突き出した時の布入の顔が頭に蘇る。どうにも不満がありありで、それ以来口を聞いてはくれなかつた。このまま地下室にいかず、戻つて謝つたほうがいいのだろうか。実際、今回の説得は強引過ぎたし、元々弱弱しい布入の、これ以上不安な姿を見たくなかつた。

だけど、そんな悩みは直ぐに消えた。

南館に足を入れた瞬間、王手の背後から、彼女の声が聞こえたからだ。

「王手！ 待つて！」

王手が慌てて振り返ると、そこには彼の元に一生懸命に走つてくる布入がいた。彼女は目をつぶつて王手の下まで必死に走つて、息を切らせながら顔を上げた。眉をひそめてはいるものの、王手の胸元辺りを見つめ、何かを言いたげに口をパクパクと動かしている。布入は手をぎゅっと握り締め、言葉を紡いだ。

「私……も……行く」

「行くつて、地下室に？」

王手の少しうわざり気味の返事に、布入はコクンと力強く頷き、

それから逃がさないと主張するよつて、王手の手を握り締めた。

突拍子の無い行動に、惑つて、「え……えあ？」と、王手が冗談

氣味に口を開いた

刹那。

彼の一いつ目の悩みも消える事となる。

突然、布入の背後から、聞き覚えのある声が王手にかけられた。

「はいはーい。布入ちゃんをいじめるのは許しませんよーー！」

「そ、うだぜ王手。そして俺達を見捨てて勝手にいつてしまつ事は許さん。ももばたけ桃畠の誓いをわすれたのか？」

こちらに近づいてくるのは男女の二人組みだった。男の方は髪を茶色に染めているが、どこか幼さが残る顔で、アンバランスさが目立つていて。そして、軽いジョークがアンバランスに染みるそんな少年 国枝一樹に、王手はさつと目線を向けた。

「？ お前ら 何で？」

「ん。俺の言葉の間違いは華麗にスルーか、まいisa。布入がな、お前が居なくて寂しそうにしているのにな 共通の親友である俺達が何もしないわけないだろい！」

布入は、ぱっと、王手の手を離して、胸の前で両手を重ね合わせた。

「……という事は、 僕を止めにきたのか？」

「いや、一緒に行こうかと」

さらりとしぐれて、あっさりしそぎた国枝の言葉に、身構えていた王手は足の力を一瞬抜かすこととなる。

そんな様子を見た長髪の少女 水無礼菜がすこし怒り氣味に、王手に尋ねかけた。

「なーにすつとぼけた顔してんのよ。私達は一心同体でしょ？ それに、驚いてんのはこっちなんだからね！ 何も言わずに勝手に行動しちゃってさ」

「……勝手に行動した事はあやまるよ。……けど、俺についていくなら、お前らも授業を休む事になるんじゃないかな？ 僕は、そんな危険をさせたくないってだな」

水無はピクつと眉を吊り上げたが、あきれたようにため息をついた。

「はいはーい。御託はたくさんでーす。あんたが勝手に行動するなんなら、私達だつてそうしまーす、はい！ もうつべこべ言わずにいくわよ。ほら！」

そういうて、水無はドン、と左手の肩を押して、南館に押し込んだ。

彼の一いつ目の不安　それは、この一人であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6334o/>

outheart

2010年11月1日20時55分発行